

## 【署長等が語る】

令和元年8月某日  
山梨森林管理事務所  
所長 水野 拓郎

### 【冒 頭】

当所の所長として山梨県に赴任してから3年目になりました。

東京、静岡、長野、群馬など、隣接する都県に勤めたことはありますが、これまで飛び越えるだけだった山梨県。通過点のひとつとしか思っていなかったここにまさか住むことになるとうとは。

考えてみれば、富士山ほか、雄大な自然や八ヶ岳山麓など日本を代表するリゾート地がある割にはなぜか印象が薄く、これまでよく考えてみたことがありませんでしたが、2年以上暮らしてみれば、非常に興味深い場所や歴史があることが見えてきましたので、思いつくままご紹介したいと思います。



### 【山梨県の山】

8月11日は祝日「山の日」ですが、今年の第4回全国大会は、当県の甲府市をメイン会場として開催されました。私も運営委員として委員会に参加してきましたが、当日は「山」に関わる多くの著名な方が会場に集合、林野庁からは本郷長官を始め、齋藤関東森林管理局長等も出席されました。

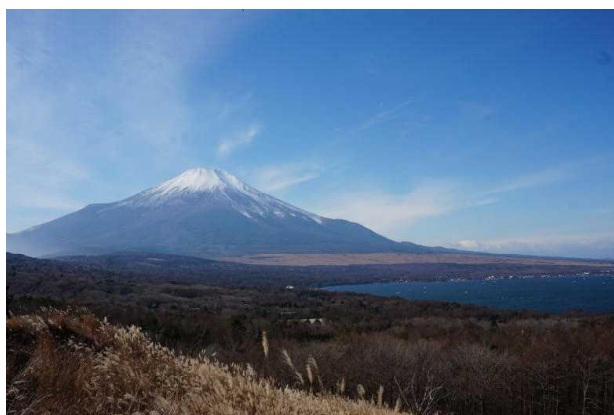
当所としても、歓迎フェスティバル会場の舞鶴城（甲府城）公園に隣接する芝生広場にブースを出展し、森林・林業の紹介や丸太切り体験、木工部材の配布などを行いました。

この式典等でも多くの方が触れられていましたが、山梨県は「やま・なし」と言っても決して「やま」が「ない」分けではなく、むしろすばらしい山がたくさんあるのはご承知のとおりです。

### <富士山>

まず第一に甲府から見て南の方、静岡県境には日本の象徴と言っても過言ではない富士山があり、これが日本最高峰であることは知らない人はいませんね。平成25年に世界文化遺産に登録されたことは、まだ記憶に新しいところですよ。

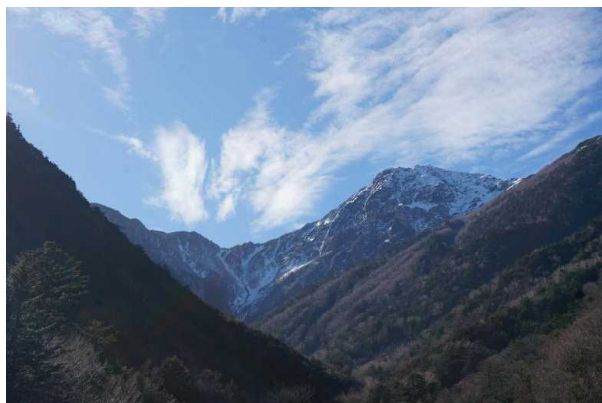
静岡県側は静岡森林管理署の管轄区域で大半が国有林ですが、山梨県側はほとんどが県有林で、残念ながら国有林はほとんどありません。小面積ですが特色ある国有林の管理と、公益財団法人オイスカが主催する「富士山の森づくり」推進協議会に参加して、県有林での森林復旧活動に協力しています。



山中湖パノラマ台からの富士山

### <南アルプス>

西の方の長野県や静岡県との境には南アルプス（赤石山脈）が横たわり、この北岳は日本第二位、間ノ岳（あいのだけ）は近年の再測量により、北アルプスの奥穂高岳と並んで第三位であることがわかりました。日本列島は世界でも最も激しく地殻変動の影響を受けている地域ですが、その中でも南アルプスは、西に中央構造線、東の山梨県側には糸魚川ー静岡構造線と日本の2大構造線（断層）に挟まれて、今でも年間4mm程度の隆起を続けています。



広河原から見た北岳

### <ハヶ岳連峰>

更に北西の長野県境にはハヶ岳連峰。諏訪地域で産出する黒曜石や山梨の水晶は、狩猟生活を主体としていた旧石器時代から切れ味鮮やかな刃物やヤジリとして日本中に流通していたことがわかっており、その後の縄文時代にかけて、数多くの遺跡が発掘されていますが、この山麓は日本で最も日照時間が長い地域であることも、厳しい寒冷期に人が集まっていたことと何か関係があるかもしれません。

この縄文遺跡を巡ることも山梨での週末の楽しみのひとつです。



山麓からのハヶ岳

### <その他>

このほか、埼玉、長野県境の甲武信ヶ岳（こぶしがたけ）周辺から西に延びる奥秩父地域には、控えめながらいくつもの秀峰があり、そのひとつ茅ヶ岳は日本百名山で有名な深田久弥が、山岳ガイドをしていて最後に亡くなった山です。この山域には金峰山（きんぼうさん）や瑞牆山（みずがきやま）、乾徳山など花崗岩の奇岩がそびえる地質地帯ですが、甲府盆地に住む人々の重要な水源地域となっており、古くから名勝として有名な昇仙峡もこのエリアに位置しています。



昇仙峡仙娥滝





### 【山梨県の国有林と県有林】

当所は山梨県に一ヶ所だけの林野庁の出先機関ですが、「森林管理署」より小規模な「森林管理事務所」に位置付けされています。

これは、端的に言って、山梨県に国有林が少ないからです。純然たる国有林だけで、約3.6千ha、官行造林地という国が面倒をみている民有林を含めても約4.7千ha弱です。と言ってもわかりにくいでしょうが、山梨県の森林面積の約1%程度に過ぎません。

これには訳があり、明治時代にそれまでの幕府領であった山林等について官民区分を行い、皇室財産の国が管理する御料林にした時、山梨県では県民からの要請を受けて、大半を県有林に編入したからです。このため、山梨県には私ども国が管理している国有林は少ないですが、この時山梨県が、明治天皇から御下賜（ごかし＝譲り受けること）いただいた恩賜林（おんしりん）と呼ばれる林野を含む県有林がとても多く、15.8千haと県内森林面積の約46%を占めています。先ほど挙げました県内の主な山岳地帯の森林も多くは県有林となっており、したがって私どもが管理する国有林はわずかで、甲府市から山梨市にかけての地域に約1.5千haと、南部町から身延町にかけての約2千ha強、それに富士山麓では吉田道登山道に沿って、その基点の北口本宮富士浅間神社から少し進んだあたりに約16haある程度です。

面積は小さいですが、それぞれの国有林には特色があり、調べて行くうちに歴史的な位置付けなど、いろいろなことがわかってきました。



甲府城に聳える恩賜林記念碑と左手前は記念館



### 【武田一族の里】

<躑躅ヶ崎（つつじがさき）のおやかた周辺>

甲府市内に約1.2千ha弱の国有林がありますが、これはまさしく戦国時代を代表する武将信玄公を輩出した武田一族（清和源氏→甲斐源氏）が、その拠点とした躑躅ヶ崎館（つつじがさきやかた）を構えていた地区を囲む裏山であり、その国有林の真ん中にあるこんもりとした要害山には、山頂に詰め城として築かれた要害城の土塁や堀りなどの遺構が今も残っています。信玄は、この城で生まれたとも、このふもとにある積翠寺というお寺で生まれたとも言われています。信玄の父信虎が永正16年（1519）に石和（いさわ＝現笛吹市）から移って館を構えた場所には、明治時代に武



要害山と積翠寺

田神社が置かれ、現在は、JR甲府駅北口からまっすぐ北に向かって延びている武田通りの行き止まりに位置しています。信虎がこの地に拠点に移したことからこの地区が甲斐国の中心的な役割を果たすようになったので、甲府（＝甲斐国の新府中）と呼ばれるようになり、それからちょうど500年目を迎えることから、今年は甲府市内でこれを祝う様々な行事が開催されていますので、ぜひ遊びに来てください（甲府市HP等参照）。

この武田神社から甲府駅にかけての一带は、甲府盆地に向かって突き出た湯村山と愛宕山に挟まれた扇状地で自然の要衝となっていますが、現在は多くの寺社仏閣のほか山梨大学や静かな住宅街となっています。当山梨森林管理事務所もこの山梨大学に隣接して立地していますが、この周辺はかつて山本勘助を初めとする武田二十四将等家臣の屋敷が建ち並び城下町を形成して、甲斐国の国府としての地歩を固めていました。

地区の中には、武田信玄を茶毘（だび）に付したと言われる塚も残っており、信玄の正室三条夫人の菩提寺円光院や信玄の父信虎の菩提寺大泉寺、徳川支配時代には甲斐総社とされた八幡神社（承久年間に武田信光が鎌倉の鶴岡八幡宮を石和に勧進して武田氏の氏神と仰いだのを始まりとし、信虎により甲府に移転された）など大小の寺社仏閣がひしめいています。



甲府を開府した信虎公像



#### <武田の杜>

このあたりの国有林は、市民から「甲府の裏山」と呼ばれ、現在レクリエーションの森（風致探勝林）に指定されており、隣接する県有林や私有林とともに山梨県の「武田の杜」保健休養林にも指定されるなど、市民の憩いの場として親しまれています。

和田国有林の中を通る県道天神平・甲府線は峠の展望台の辺りまでつづら坂で高度を上げて行きますが、和田山もみじ街道育成会が管理する山梨県の木「カエデ」がたくさん植えられており、春には新緑、秋には紅葉が鮮やかで、行き交う人の目を楽しませてくれます。展望台からは甲府盆地を見下ろすことができ、目を上げると御坂山脈の上に富士山が大きく覗いて絶景です。峠を越えると左手に千代田湖が広がり、道はそのまま昇仙峡に続いています。



もみじ街道の紅葉

千代田湖の辺りから少し登った最高地点の岩の上に白山八王子神社の小さな社がありますが、ここから国有林と県有林の間の稜線を湯村温泉まで下る遊歩道は左に富士山、右に南アルプスを望むことができる爽快なコースで、南に向かって延びる尾根の先端にある湯村山の山頂には、やはり武田



一族が整備した湯村城と呼ばれる山城のあとがあり、戦国時代には狼煙（のろし）を焚いて、要害城などの武田の里に急を知らせる当時の高速通信網の重要な拠点であったと思われます。

#### <甲斐善光寺>

さて、甲府に、甲斐善光寺というお寺があるのはご存知でしょうか？

現在長野市に総本山がある善光寺は、これも私がかつて勤務していたことがある長野県飯田市にあった元善光寺（座光寺）から本尊を持ってきたもの、ということは知っていましたが、全国各地に非常に多くの末社があると聞いていたので、甲府市のおおかたそのひとつだろう、くらいにしか思っていなかったのですが、参拝してびっくり。敷地は非常に広く、本堂や山門もとても大きく、立派で関東有数の木造建築物に位置付けられています。



甲斐善光寺本堂

どういふ縁起があるのかと調べてみたらまたびっくり。信玄が上杉謙信と信州の川中島で戦った話はあまりにも有名ですね、あれは、10年以上に渡って五回ほど対戦したらしいのですが、その間に善光寺が戦火にさらされることを恐れた信玄が、甲府に寺を建立して本尊以下諸仏や経文、寺宝類から坊さんまでをそっくりここに移してしまったというものなんだそうです。武田氏滅亡後江戸時代になって本尊や経文などは長野の善光寺に帰されたので、現在ではまた長野が総本山となっていますが、甲府の善光寺もその後、徳川氏などの庇護を受け、本堂も山門も一度は大火で焼失しましたが、再建され、今日に至っています。

#### <板垣の里>

この甲斐善光寺がある地は、武田の里よりもひとつ東寄りの扇状地ですが、上流の国有林の最上部には板垣山と呼ばれる山があり、一帯は現在も板垣山国有林と呼ばれています。この下の集落は現在も果樹栽培などが盛んで、かつて板垣村と呼ばれていたそうですが、板垣山国有林では、この集落や善光寺などを保全対象として、国有林内直轄治山事業を実施しています。



板垣山国有林治山現場

板垣、と言えば、明治維新前後に活躍した板垣退助を連想しますが、板垣退助は土佐藩の出身ですし、偶然の一致だろう、と思っていたところ、調べてみたら、意外な関係がわかりました。

板垣退助は、土佐では乾姓で幼名は猪之助だったのですが、乾家の初代は正信といい、信玄の二十四将のひとり、板垣信方の孫だったと言うのです。明治維新前の戊辰戦争で、退助が近藤勇率いる新撰組を追って甲斐国から江戸に向かう時、岩倉具視らに「甲斐源氏の流れを汲む旧武田家家臣の板垣氏の末裔であることを示して甲斐国民衆の支持を得よ」と助言されたことから板垣氏に姓を復し、そのとおり甲州勝沼の戦いで新撰組を撃破することができたのだそうです。

## 【南部町上佐野地区の木材生産団地】

### < 国有林の事情 >

当所管内で最もまとまりがある南部森林事務所の国有林は、静岡県境で南部町と身延町にまたがった地域に位置しており、温暖湿潤な気候が樹木の生育に適しているのか、管内の人工林としては比較的良好な素性のスギ、ヒノキの森林を形成しています。

南部町は県内でも最も木材生産が盛んな地域であり、優良な森林組合の共販所もあって、県内はもとより、静岡県、東海地区、首都圏などの流通業者も買い付けに集まってくるので、平成25年に、隣接する県や森林組合、森林整備センターなどと森林共同施業団地を設定し、相互に利用可能な林道の開設を進めるなど、生産団地の整備を進めて木材利用による地域振興への貢献を目指しています。森林資源としては比較的良好であると自負していますが、国有林の所在地域がきわめて奥地で、大半の町民が生活する富士川沿いからは地形に沿った細くて急カーブの多い町道を1時間以上走らなければならない、作業効率が悪いことや搬出経費が掛かり過ぎることがボトルネックとなっています。



上佐野国有林内林道新設工事

### < かつての賑わい >

この長い町道を抜けて国有林に入った最初の人工林の中をよく見ると、石垣積みの階段状の平地がいくつもあり、この一角には、今も使っている古いプレハブの休憩小屋があったり、山ノ神が祀られている場所があります。今は臨時職員として森林事務所を手伝ってくれている地元のOBの方に聞くと、かつてはここに職員が常駐する事業所があり、炊事婦さんもいて、売店などもあったとか。その中には住宅（宿舎？）もあって、とある町役場の職員の方から、子供の頃、ここに住んでいましたと聞いてびっくり。今は石垣だけが、その頃の賑わいを伝えています。



国有林入り口付近の石垣

### < 金鉱脈？ >

この最上流部に位置する谷で、治山事業を行っていますが、昨年、堰堤（えんてい）を設置するため谷沿いの斜面を掘っていたところ、防空壕のような人工的な穴が見つかり、旧石器人や縄文人の遺跡か、何かの鉱山のあとなどの史跡ではないかと心配になって町誌を調べたところ、この辺りにはかつて金山があったということがわかり、慌てて身延町下部温泉の湯之奥金山博物館に相談してみました。丁寧に館長さんと学芸員さんが対応してくださり、博物館に展示された一般的な金山の話などを伺ってから事情を説明して写真を見せたところ、迷わず「金山（金鉱跡）ですね」と。なぜか少しうれいような、困ったような気がしながら、どういう対応が必要かなどをご指導いただきました。



こんな奥地に穴がぽっかり？

その後、日を改めて、県の文化財担当者も伴っ



て現地を確認してもらいましたが、そこは、湯之奥金山の反対側にあたり、金鉱脈が続いている可能性がある、鉱脈を探すときに目当てにするセオリーどおりの場所に当たる、坑道は比較的高さが高いので、江戸時代後期から明治期以降のものであろう、などと説明していただき、奥深いものを感じました。残念ながら坑道に露出した金脈は見当たらず、試掘抗だったかもしれない、ということで現場をあとにし、後日県に必要な届け出をして、工事を続けることができました。坑道を壊してしまうことのないように、見つかってすぐ、掘削の場所を変更していましたので、特段の措置は必要ないとのこと指導でしたが、さすが甲州金の国、山中いたるところで、金山衆が活躍していたことが、こんなことから伺えます。

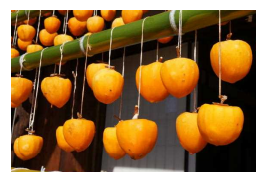


奥行きは約20m!

#### <南部氏>

さて、この国有林が所在する南部町は、山梨県の最南部に位置しており、ずいぶん安易な町村名だなと思った（失礼）のですが、調べてみるとここは、武田氏と同じく甲斐源氏を祖とする加賀美遠光（かがみとおみつ）の三男であった光行（みつゆき）が、この地を領して南部氏を称したことに始まるとあります。

南部と言えば東北の岩手の辺りにも南部せんべいや南部鉄器で有名な地域があったなあと思っていたら、なんと、この光行が源頼朝の奥州征伐に従ったことから青森、岩手両県に跨がる広大な領地を拝領して盛岡に居城し、その子孫が盛岡の領主となって近世に続いたとのこと、東北の南部氏もこの南部光行が初代ということになるようです。東北の北部なのになんで南部なのかと聞いていたのですが、どうやらこれは、甲斐国の南部、ということだったようです。



#### <富士川の船運>

この南部町に当所の出先機関南部森林事務所がありますが、この地名を「内船（うつぶな）」と言います。富士川は、諏訪湖や南アルプスに端を発する釜無川が、甲府盆地で笛吹川と合流して駿河湾に向かう下流のことを言いますが、これは日本3大急流のひとつで、ひとたび大雨が降ると各地で洪水を起こす暴れ川でしたが、信玄堤を代表とし、歴史的に各種の治水対策が試みられた川でもありました。徳川家康の命により京都の豪商角倉了以（すみのくらりょうい）が1607年から5年を掛けて航路を開削し、駿河と甲府盆地を結ぶ水運が始まりました。高瀬舟などにより米や塩などの農産物や海産物が大量に運ばれて沿線の河岸には問屋や商家、宿屋が立ち並び、たいへん賑わったと言います。内船という地名は、この富士川通船の造船所があったことから付けられたと言われており、付近はスギやヒノキの良材の産地として有名で、内船は富士川の重要な河湾であったそうです。

明治時代に東海道線が開通し、その物資も静岡から山梨へはこの富士川の水運により運ばれてしばらくはますます賑わっていたようですが、大正から昭和にかけて中央線、身延線などが開通すると輸送手段は鉄道に取って代われ、水運は廃止されて、沿線の町は往時のような賑わいをなくしてしまいました。



富士川随一の景勝地といわれた屏風岩

## <下山大工>

この地区（峡南地区）の国有林は大半が南部町にあり、わずかに身延町にもかかっているものの、林道も未整備で特段事業も行っていないことから、残念ながら、当所と身延町とはあまり関係が深いとは言えません。

しかし、身延町と言えば、日蓮宗の総本山である身延山久遠寺が有名で、門前町までであると言いますし、その身延山には山頂までロープウェイが通っていると聞き、雨の日でしたが、近くに行ったついでに入り口まで行ってみたところ、車から見た三門がかなり立派でびっくり。

甲府の甲斐善光寺も立派でしたが、この久遠寺も立派、そのほか山梨県内には、思ったより多くの寺社仏閣など木造建築物があり、これまで各地の転勤先で見知った歴史的木造建築物にも

劣らない非常にしっかりした技術で作られた凝った建物が多いように感じたのですが、富士川沿いの国道52号線を走っていると、身延町内の国道沿いに、控えめながら「下山大工発祥の地」という看板が立っているのが気になりました。

「下山大工」なんて聞いたこともありませんが、こんな看板があるなんて、きっと有名なんだろうな、と思いながら、仕事で出会った森林・林業の関係者に片っ端から聞いてみても誰も知りません。こうなると私も意地になって、ネットなどで調べ回ってみましたら、身延町のHPにとっても詳しく載っており、下山という地区には各種建築普請に携わった下山大工と呼ばれる集団がいて、代々県内の代表的な木造建築物の建築や修復に携わっていたのだそうです。記録としては、山梨県内の寺社仏閣の棟札を調べたところ、笛吹市の神社の棟札に承久元年（1219）の年号と「下山大工 七郎二」という名前が書かれていたとか。これは鎌倉時代に相当しますので、少なくともその頃にはこの地区に「下山大工」という技術者集団がいたこととなります。先ほどの久遠寺や甲斐善光寺の建築にも下山大工が関係したことがわかっており、主に竹下家と石川家が棟梁を務め、この両家は江戸時代には、領主の御用を勤めるのと引き換えに、年貢などいくつかの義務を免除される役引（やくびき）職人に加えられていたそうです。

そんな下山大工は、今はどうなったのか、もう途絶えてしまったのかと、あれこれ調べてみたところ、いましました、甲州市の「石川工務所伝匠舎」さん。なんと、やはり「石川」さんでした。そして縁あってこの石川さんと会うことができ、石川家に伝わるご先祖のお話を伺ったり、工房での仕事ぶりを見せていただくことができました。江戸時代のご先祖「石川七郎左衛門重甫」が書いた「匠家雛形増補初心伝」は、全国の宮大工が手本にしたと言われています。

甲斐国の石川一族は、渡来人の子孫ではないかという説があるのですが、この話は長くなりますので、またの機会（もうそんな機会はないと思いますが）にさせていただきます。

その下山大工のことを調べる過程で、山梨県内の文化財や歴史に関わる人たち、



身延山久遠寺の三門



匠家雛形増補初心伝



地元で伝わる民謡「下山甚句」保存会の皆さんなどと懇意になり、今年の5月には個人的な立場でこの人たちと協力して、下山地区の公民館を借りてシンポジウム「下山大工を語る会」を開催しましたが、今も週末には、この「下山大工」の足跡を尋ねて歩いたりして、知られざる山梨の歴史・文化を堪能しています。

#### <木喰上人の微笑仏>

身延町で「木工」と言えば、もうひとり、忘れてはならない人がいます。江戸時代後期に、円空（江戸時代前期の修験僧・仏師・歌人。各地に「円空仏」と呼ばれる独特の作風を持った木彫りの仏像を残した）に触発されて、同様に全国を歩きながら、千体以上の木造仏を作って回った木喰上人（もくじきしょうにん）です。

仕事で岐阜にいたとき、円空仏に出会い、すばらしいと思ったのですが、たぶんその時「木喰上人」という人を知ったのだと思います。山梨に来てからふと思い出し、調べたところ、身延町の古閑という集落がその出生の地でした。柳宗悦（やなぎ むねよし=そうえつ）という明治から昭和にかけて民芸運動を起こして活躍した思想家に高い評価を受けてから、日本各地で再発見された特異な仏師ですが、その作品は「微笑仏」とも呼ばれ、どれもみな穏やかなほほえみを浮かべているのが特徴です。



この作品は、個人所有になっているものが多く、なかなか実物を見るチャンスがないのですが、運良く県内で展覧会が開催され、実物や現代の作家による復元作品などを見ることができました。

下山大工を通じて知り合った歴史・文化財の関係者や愛好者などとも話しているのですが、そのような繊細な木材彫刻技術を持った人がこの地区にいたということと何か関係があると思われてなりません。



弘法大師像（県立博物館所蔵）



#### 【富士東部地区の諏訪森（すわのもり）】

##### <富士山信仰と登山道>

さて、前に、富士山麓では、富士吉田市にたった16haの国有林があるだけ、と書きました。吹けば飛ぶようなこんな小さな団地にどんな意味があるのか。

富士山が信仰の山であることは、ユネスコの世界文化遺産に指定されたことからもお分かりだと思いますが、山頂に至る登山道は数本あり、どれも概ね山麓の浅間神社をスタート地点としています。山梨県側の登山道のうち、北口本宮富士浅間神社を基点とする吉田口登山道は、16世紀から17世紀にかけて長谷川角行（はせがわかくぎょう）が修行活動に利用したとされ、18世紀前半には富



太子講信者恒例の富士登山に同行

士講隆盛の礎を築いた食行身禄（しょくぎょうみろく）が、入定に際して信者の登山本道を吉田口と定めたことから、富士講信者の入山が次第に増加し、18世紀後半には他の登山道の合計数にも匹敵するほど多くの道者・富士講信者がこの道で山頂を目指しました。現在でもこの道は、山麓から山頂まで徒歩によって登ることができる唯一の登山道となっていますが、諏訪森国有林は、北口本宮富士浅間神社をスタートして間もなく、吉田道の沿線に細長く続くアカマツの高齢林で構成されています。この浅間神社一帯は、もともと地域の産土神を祀った諏訪神社があったことから「諏訪森」と呼ばれていたようで、現在もこの諏訪神社は、北口本宮富士浅間神社の境内地内に鎮座しています。8月下旬になると富士吉田市で行われる「吉田の火祭り」は、北口本宮富士浅間神社の祭礼であるとともに、この諏訪神社の祭礼でもあり、富士山の山仕舞いの儀式に位置付けられています。

#### <雪代被害から町を守る>

しかし、この小さな国有林にはもうひとつ別の意味があります。

諏訪森を構成する高齢級のアカマツは、本州でも最大級の大径木が林立しており、長い間、天然林と思われていましたが、古文書を調べたところ、約400年近く前の寛永年間に「雪代（ゆきしろ）」よけのために、村を挙げて植林したという記録がみつき、今では人の手によって植えられた人工林であったというのが定説になっています。



雪代というのは雪解け水のことですが、富士山では雪解けの季節に大雨が降ると、火山灰や砂れきを巻き込んだ濁流がおこり、山津波のように集落を襲うことがありました。

富士吉田の町は、富士山麓の水がすべて集まってくる場所にあり、上吉田の住民はかつてはこの雪代をさけて何度も集落移転を繰り返していましたが、それでも雪代の被害から逃れることはできず、戦国時代に現在の中曽根地域に移転しました。古文書の記録には、江戸時代を迎えてから寛永年間に、信州の諏訪と伊那からアカマツの苗を買い付け、周辺の百姓に命じて植えさせたとあります。

これにより雪代による水害は少しずつ減少し、人々は下草刈りや枝打ちなど、アカマツの手入れに精を出して大切に保護しました。風で倒されたり寒さで枯れる木もありましたが、これらは薪として利用され、吉田名物の火祭りのたいまつにも使われたと言います。

その後、富士山麓の植林は進み、治山や砂防工事等も実施され、今では雪代による被害はほとんどなくなっていますが、年によっては、春先にスラッシュ雪崩（≡雪代）が発生することがあり、平成30年にも小規模な濁流の発生が報道されて市民の不安を煽りましたが、大事に至ることはありませんでした。



2018年の吉田の火祭り

私ども山梨森林管理事務所では、この歴史的なアカマツ林を保護林に指定し、将来にわたって大規模に改変することなく維持していくとともに、近隣の民有林アカマツ林に迫っているマツクイムシの被害からこの森林を守るため、防除液の樹幹注入を進めるなどの対策を実施しています。



### 【最後にもひとつ】

赴任するまで、正直あまり興味のなかった山梨県。着任していろいろ調べて行くうちに、イメージは一転、最近では、旧石器時代からの歴史を背負っているなど、ひょっとして日本一興味深い場所かも知れないと思うようになってきました。

この文書では、こちらに来てから拾った小話のうち、国有林と多少とも関わりのあるものに限って綴らせていただきました。

山梨森林管理事務所のホームページでは、フォトギャラリーのコーナーも開設して、国有林や仕事に限らず、季節毎に山梨で見聞きした興味深いことを掲載するようにしていますので、ご覧いただければ幸いです。

最後にもうひとつ。山梨県には海がありません。が、県内の遺跡からは、貝殻や塩を作る器、鯛の骨などが出土しており、太古の昔から海辺との交流が盛んであったことが推測されます。

そのルートのひとつ、富士山麓の朝霧高原を通過して精進湖から甲府盆地に一気に下る「中道（なかみち）」という古道がありますが、その道を甲府盆地に下ってきた辺りに「右左口宿」というかつては宿場町だった集落があります。読めますか？「うばぐちじゅく」と言うのですが、なかなか趣のあるひなびた集落で、かつては中道で運ばれてくる海産物などの商いで稼いだ家も多かったらしく、坂道の街道沿いに階段状に並んだ家は、どこも皆、意外に奥行きが深く、ほとんどの家に蔵がついています。



右左口宿を抜ける中道

この集落を歩くと随所に少し変わった歌の札が掛けてありますが、これはこの出身で大正から昭和にかけて、多くの歌を世に問うた「山崎方代」という歌人の歌だそうです。「やまざきほうだい」と読むのですが、歌人などに興味もありませんでしたし、正直ここを訪れるまでは全く聞いたこともなく、読み方を知るまでは、果たして男なのか女なのかさえわからない有様でした。調べてみると、戦争で視力をほとんど失い、生涯定職にも付かず、結婚もしなかった酒たばこ浸りのしがたいおっさん（失礼！）だったようで、24才から横浜に住んで、「望郷の歌人」などと言われながら、おもしろい歌をたくさん詠んでいます。

例えば、こういうの、

◇一度だけ本当の恋がありまして

南天（なんてん）の実が知っております

なんてね。

歌なんて、がらでもないのですが、なぜか浸みます。

なんかことば使いが、口語調であり、おかしな感じなんですけど、不思議に惹かれるのを感じます。

この人の歌から最後にひとつ

◇生まれは甲州鶯宿峠（おうしゅくとうげ）に立っている

なんじゃもんじゃの股からですよ



この「なんじゃもんじゃ」の木は、本当に山奥の峠道沿いに立っている「リョウメンヒノキ」の巨樹だそうですが、一度見に行きたいと思いながら、

場所を確認していたところ、ネット上にある情報を発見。去年の大風で、ぼっきり折れてしまったそうです。残念。

方代さん、間に合いませんでした・・・。

